
風に乗って

ピヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風に乗って

【Nコード】

N4711B

【作者名】

ピヨ

【あらすじ】

いつかは、みんなこの星からいなくなる。年をとって、病気で、事故で。でも、こんな早くいなくなっちゃうなんて思わなかった。彼女は若くしてこの星を去って行ってしまった。僕に一通の手紙を残して。

第一話

鳥は生まれてすぐに空を飛び巣立ちをする。

百獣の王の子どもも、生まれて少したつと狩りを始める。

鳥は木の実や虫などを食べる。

百獣の王達は動物を食べて生きていく。

俺ら人間もいろいろな肉、野菜、魚。

いろいろな物を食べて生きていく。

しかし…

形ある物いつかは滅びる。

俺らが暮らすこの地球もいつかは滅びるんだ…

俺の名前は達也。

普通科の高校二年生。

「なあ、達也。」

俺に話しかけてきたのは同じ高校の一月いっきだ。

俺はなににも考えないまま口を開けた。

「ん?？」

「相談あんだけど。」

「一月が?俺に?」

一月はいつも明るくなんにも考えてなさげな顔をしている。けど、
そう言うやつに限って、結構病んでるんだよな。

一月は顔を赤くして言った。

「なんだよ！？俺だって悩むときがあんだよ！」

「あはは！わりーわりー。で、なんだよ？」

俺は一月の相談を聞くことにした。

「あのさー、授業終わったら屋上きてくんね？」

「ここで言えばいいじゃん？」

「ここじゃ、話せねーから屋上来いって言ってんの！！！！」
「またもや赤面する一月。」

俺はこいつの顔を見て人目でわかった。

恋だ。

そー思った。

授業が終わり、屋上に行くと、一人黄昏る一月の姿があった。

「なーにカッコつけてんだ？」

俺は一月に近づきながら言った。

「わりーな。急に呼び出したりなんかして。」

一月が申し訳なさそうに言う。

「べ、別にいいけど。で？相談てのは？」

「実はさ。」

一月は深く深呼吸をし、話した。

第二話

「実はさ、2ー4の明菜って子知ってるか？」
一月は少しニタニタしながら言った。

「あー、南明菜か？」
なぜか俺は知っていた。

「そうそう！！あのこマジ可愛いよなー。惚れちゃったよ。」

予感的中！！！！！！
やっぱり恋をしていたんだな。

しかし、南明菜とはずいぶんと高レベルの子を選んだな、まあ無理もないかもしれないな。
南明菜は俺らの中の憧れのプリンスだ。

誰が好きになってもおかしくないな。

暗い声で話を続ける一月。
「でも、無理に決まってるんだよなー。俺のことなんか気にもかけ
てくれるはずがないや。」

「そんなことねんじゃね？」

フォローするようにすかさず口を開く。

「メールとかしてんの？」

一月は下を向いて首を横に振る。

「聞いてねーのかよ!!」

呆れたように言う。

「だって、拒否られたら怖いし。」

「やってみなきゃわかんねーだろ！」

「じゃー達也もついてきてよ。」

「わかった。」

俺らは2－4に向かった。

2ー4の廊下から教室に顔を覗かせると窓際が一番後ろで5、6人でたまっているグループの中に南明菜はいた。人気は目立つその美しさ。

俺は一月に言った。

「早く聞いてこいよ。俺待ってってから。」

「おう。」

震えた声で言いながら、一月はガチガチになって教室に入った。

五分くらいして、一月は帰ってきた。

俺は手に汗握りながら聞いた。

「どうだった？」

一月は涙目で小さな声で答えた。

「…た。」

「あ？」

「聞いた。達也！聞いたよ俺！」

大声で喜ぶ一月に俺は少し恥ずかしかった。

まあーこれで一件落着だな。

そんなことを思いながら、帰り道の夕焼け空を見つめながらささやいた。

第三話

今日は土曜だ。暇すぎて何もすることのない俺は、家でゴロゴロしていた。

（二月あれからメールしてんのかな。）

一月が南明菜にメアドを聞いてあれから三週間。うまくやってんのかな。

他人のこと考える余裕なんかないはずなのに。
俺は彼女いない歴もうすぐ一年になる。

一年前。

俺は三年付き合ってた彼女がいた。

名前は香奈。

あの頃の俺は中学生ながら香奈となら一生一緒にいたいと思っていた。
けど、

人生そんなにうまく行くもんじゃないかった。

俺にとって香奈との出会いは悪夢そのものだったのかもしれないな。

二股をかけられ別の男のところへ行ってしまった香奈を俺はただ見ているだけだったから。

やっぱ俺はガキだったな。改めて実感した現実。

俺はそれから女なんて信じられなくなった。

なんて、昔を思い出してみた。

「はあ、寝るか。」

俺は眠りについて。

目が覚めたのは、午後八時。

「かなり寝たな。」

かれこれ五時間は寝ていた。

携帯を見るとメールが一件あった。

「誰だ？」

受信メール

こんにちは（・・・）あたし、中山愛子って言います。達也くんと一緒に高校かよってます。

中山…愛子？誰だろ？

何組ですか？

受信メール

2-4です。

4組？何で俺のこと知ってんだ？
一応登録しておくか。

TO..中山愛子

なんで俺のアド知ってんの？

送信。

パララン。

受信メール

From..中山愛子

えっとー（^^;）明菜から一月くんに聞いてもらいました。今更
ですが、メールしてくれませんか？

なるほど。ようやく理解できた。まあ、メールくらいだったらいい

か。

TO..中山愛子

別に構わないけど。

パララン

From..中山愛子

ほんとし??? ヤッターUへエへU

中山愛子。顔を知らない子だけど、顔を見てみたいなー。わかることは2ー4で南明菜と友達。月曜日見に行ってみようかな。一月も誘ってみるか。

俺はこうして、月曜まで待つことにした。

第四話

月曜日。

中山愛子という子が頭から離れないまま学校へ行く。

女なんか信じらんねー。これが俺のモットーだ。

しかし、なんだか放ってはいられない感じがする。

なんだ？この胸を締め付ける感情は？

「おはよーございます♪」

と、ぽんと肩を叩いてきたのは、ひとりの女子。

「おはよ…ございます。」

こいつは誰だ？という疑問を浮かべながらついあいさつをしてしまった。

「達也くんだよな？あたし、中山愛子です。」

この子が？中山…愛子。

セミロングで前髪を七三にわけ、化粧もしていない純粋さ。身長は160弱と高めでスラっとした体。

「あのー？」

顔を覗いてくる愛子。

「あっ…ごめん」

つい見とれてしまった。

一つの疑問が浮かぶ。

誰かに似ている。でも、誰だ？わかんねーや。

「あたしの顔に何かついてます？」

ちょっと怒った態度で聞いてくる。

「あっ、いや違うんだ。ごめん」

「てか、学校さぼって遊びに行きませんか？」

笑顔で聞いてくる。

俺はつい誘いに乗ってしまった。

「さぼるか！」

そう言って学校を抜け出した。

俺らは喫茶店に入った。

「いきなり、声かけてすみませんー。どうしても話がしたくって！」

愛子はコップの中の氷をストローでぐるぐるしながら謝った。

なんて積極的な女なんだと思った。

「いや、俺も話してみたかったから。それと、タメ語でいいから！」
少し動揺している俺。

「そうですかー？じゃお言葉に甘えて、てかあたしのこと愛子って呼んでください！」

そういうと、えへっと笑顔で笑った。

この積極的な性格、行動、そして、なによりも可愛らしいこの笑顔。
俺は誰に似ているかわかった。

香奈…だ。

この子はなんとなく香奈に似ている。

それから月日が流れ三ヶ月がたった。

一月は俺と一月それと明菜と愛子でダブルデートをしようという提案を出した。

遊ぶくらいならいいよな。そう思い、俺は賛成した。

「じゃー俺は明菜誘うからお前は愛子誘っておけよ。」
やる気満々の一月。
実はこのデートで一月は明菜に告るらしい。

「おう。」
そっけなく答える。

俺はメールで愛子を誘ってみた。

TO..愛子

来週の日曜日俺と一月と愛子と南さんで遊園地いかない？

パララン

受信メール

From: 愛子

行く行く!!!!!!

答えは即答だった。

To: 愛子

じゃ来週の日曜ね！

送信

パララン

受信メール

From: 愛子

わかった！じゃねーヾ（^▽^）ノ

来週のデート正直楽しみなんだ。いい思い出になればいいな。香奈のこと忘れられるように…

第五話

日曜日。

今日はダブルデートの日。

一月はいつにも増して張り切っている。

「じゃあ達也！午後7時まで、一緒に行動。その後別行動だ！いいな？」

「はいよー。」

なんか今日の一月は怖い。

「よし！待ち合わせの場所に行くか！」

「二月。」

「なんだ？」

「頑張れよ。」

「ああ。すげーきんちようすつけどな。」

俺らはハイタッチをして家を出た。

待ち合わせの駅にはもう二人はいた。

愛子が手を振っている。

「もー！遅いよー」

愛子がほっぺをふくらませてだだをこねた。

「ごめん、ごめん、一月が準備遅くって。許せ！」
と言って、愛子のでこをコツンと指でつついた。

「じゃー行こっか！」

明菜が張り切ってそう言った。

電車で約一時間半。ついたと同時に見える、大きなジェットコースター。

四人は遊園地の中に入っていた。

最初に乗ったのは入り口からも見えた大きなジェットコースター。
俺は高所恐怖症でジェットコースターは大の苦手だ。

しかし、ここで引き下がっては男ではないと思い、勇気を出し乗りこんだ。

ジェットコースターに乗り終わると、頭がくらくらして倒れそうだった。

楽しい空気を壊してはいけないと我慢した。

お化け屋敷、バイキングと次々と乗りこなしていくうちに約束の間になった。

一月が言う。

「では、別行動タイムです！二人だけの世界に入っちゃいましょうー！」

と言い。一月と明菜は夜の遊園地に消えていった。「あそこ座んない？」

愛子はベンチを指差した。

「うん。」

俺たちはベンチに座った。

長い沈黙…

何か話そうと思うのだが何にも出てこない。
しかも、心臓が飛び出そうだ！

なにかはなさきや。

そうだ！
と俺はひらめいた。

「いいところ連れてってやるよ！」

そう言って俺は愛子の手をとり、走り出した。

「ちよっ、どこ行くの？」

不安な顔をする愛子。

「いーから、ついてくりゃ分かるって！」

電車に乗って○×駅で降り、山に登る。

「ねー、どこ行くの？」
ますます不安になる愛子。

「目閉じて。」

そう言って俺は愛子をそっと歩かせた。

「目あけていいって言うまであけんなよ！」

「まだ？」

「いいよー！」

愛子はパツと目を開けた。

「うわー！」

と愛子は歓声をあげた。

俺らの前には星のように輝く美しい夜景。

「これをあたしに見せたかったの！？」
満面の笑みで聞く。

「おう！」

「すごーい！ありがとうね！」

俺は自分の気持ちに素直じゃないな。俺は愛子が好き…なのかもしれない。

「星ってきれいだよね。」
愛子がボソツと言う。

「星ってあんなきれいに光ってるけど、いつかなくなっちゃうんだよね。人間も同じだよ。人間もいつか死んじゃうんだよ。」
悲しい顔をする愛子。

「違うよ。人間も星も星に還るんだ。前に本で読んだことがある。形ある物みないつかなくなる。けど死ぬわけじゃない。星に還るだけだって。だから、またどこかで逢えるんだ。」

「そっか。またいつか、逢える…か。」
また悲しい顔をする。

「どうした？さっきから変だぞ？」

「そんなことないよ！」

そっけない笑顔をみせる。

「なんか悩んでんのか？好きな人でも出来たか？」
と冷やかした。

「うん…でも…」

「でも？」

「元カレに未練があつて。あたし、今なら話せる。だから、聞いてくれない？達也になら話せるんだ。誰にも話せなかった気持ち。」

俺は静かに頷いた。

「あたしね、前に二年付き合ってた彼氏がいたんだ。でも、その人下校中事故で：それ以来あたしは彼氏を作っても長続きしないの。あの人のことを思い出してしまつて。忘れらんなくて：」

愛子は泣き出してしまった。俺は励ますように言った。

「別に忘れる必要なくね？その人は今も自分の胸の中、思い出の中にいるんだよ。それに、愛子の元彼は星に還っただけじゃん？だから、またどこかで逢えるって！！」

「そんなこと言われたって：グスンッ」
泣き止もうとしない。

「俺もさ、三年付き合ってた彼女がいたんだ。でも、そいつに二股かけられちゃってさ。バカな話だよな！三年も一緒だったのに全然気づかなかつたんだぜ！ハハッ：」

本当は俺だって傷ついてんだ。けど、愛子ほどではない。けど、泣いてほしくないから、愛子の笑う顔が見たいから。でも、そんなことと言えるはずがない。本当は俺だって今日告白したかった。けど、そんな勇氣：

俺にはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4711b/>

風に乗って

2010年11月2日03時26分発行